

【書評・紹介】

中村 一枝 編注『永久保秀二郎の『アイヌ語雑録』をひもとく』

(札幌, 寿郎社, 2014 年 12 月, A5 判, 323 頁, 2600 円+税)

中 村 和 之

本書は、さきに『永久保秀二郎の研究』(釧路叢書第 28 巻、釧路市、1991 年)を著した著者が、永久保が残した『アイヌ語雑録』を取りあげた研究である。

永久保秀二郎(1849~1924 年)は、釧路市の春採でアイヌ民族の子弟の教育に長年従事した教育者である。永久保の功績は、釧路市では比較的早くから顕彰がなされていたが、広く知られるようになったのは、前述の『永久保秀二郎の研究』が刊行されてからである。著者は、市立釧路図書館に寄贈されていた『永久保秀二郎日誌』に取り組み、この史料の丹念な読み込みを通じて、北海道の東部で活動した 1 人の教育者であり知識人でもある人物の生涯を、いきいきと甦らせた。その後、著者は『永久保秀二郎日誌』とともに市立釧路図書館に架蔵されていた『アイヌ語雑録』の研究に着手し、その成果は釧路アイヌ文化懇話会の『久摺』第 3 号から第 12 号(1994~2010 年)に発表された。本書は、著者の研究の集大成である。

本書の構成は、以下のようになっている。

はじめに

寄贈文書目録

『アイヌ語雑録』解題

1. 永久保秀二郎について
2. 『アイヌ語雑録』の体裁
3. 『アイヌ語雑録』の情報提供者四名の略歴
4. 『アイヌ語雑録』の着手時期及び進行過程

凡例

出典及び参考文献

語彙の部

アイヌ語未記載の語

伝承の部

1. アイヌの教訓
2. カムイノミ シノツサア
3. タブカラ
4. アイヌの伽噺
5. 明治天皇崩御

表紙画像

6. カムイ ラン
7. ウララ シュイ
8. ホイヤホイヤ
9. 歌謡以外

アイヌ語方言の地域性

1. 日高東半部、北海道東部・北部のアイヌ語方言に包含すると思われる語
2. 日高西半部、胆振、北海道中・西南部のアイヌ語方言に包含すると思われる語

参照文献の影響

1. 近世の文献類と近似性が高い語
2. バチラー辞典の語と近似性が高い語

日本語－アイヌ語索引

『永久保秀二郎の『アイヌ語雑録』をひもとく』によせて一奥田統己
おわりに

本書の大部分を占めるのが、語彙の部である。この部分の叙述には著者の工夫があるので、そのことについて説明する。まず原本（以下、市立釧路図書館蔵本を原本と呼ぶ）では、日本語の単語ないし語句が 50 音順で並べられ、その脇にアイヌ語訳がカタカナで併記されるという形式を取っている。永久保による注が付されている語句もある。ところが本書では、原本の配列をそのまま記録するのではなく、アイヌ語のカタカナ表記を、50 音順に配列するように並べかえられている。そして各単語ないし語句の右側には、原本の第何丁の表・裏のどちらに記載があるかが記されている。それぞれの単語ないし語句には、著者による細かな解説がついている。その解説は、ジョン＝バチラー・服部四郎・知里真志保・久保寺逸彦・萱野茂らによる既刊のアイヌ語辞典の博搜によるものであり、上原熊次郎『藻汐草』なども参照されている。なお原本で、永久保がアイヌ語訳を記載していない単語があるが、それらは「アイヌ語未記載の語」に一括されている。採録されているのはほとんどが単語であるが、「シタコ ホモ ウヌカラ アン ワクシユ ウエシヨロ アン ナーシバラク暫く御目に懸らなかつたから御挨拶致します」（123 頁）など語句を採録する例もある。

つぎに伝承の部では、最初に原本の 146 丁の「アイヌの教訓」の写真版が掲げられ、解説が付けられる。以下「歌謡以外」まで、同じように写真版と解説がセットになっている。

このほか本書には、アイヌ語方言の地域性・参照文献の影響についての著者の見解がまとめられており、さらに日本語－アイヌ語索引もあって読者に使いやすい配慮がなされている。

評者はアイヌ語については初学者であり、本書のアイヌ語の解説については評価できない。しかし北海道の東部で 20 世紀の初頭に記録されたアイヌ語の記録が、手に取りやすい形で提供されるようになった意義は大きいと思う。そもそも、永久保に関する資料はこれまで閲覧が難しかった。永久保よりやや遅れて、十勝地方でアイヌ民族の教育に活躍した人物に吉田巖（1882～1963 年）がいる。吉田の業績が比較的容易に閲覧できるのに対して、永久保の業績は活字化が遅れた。近年、『永久保秀二郎日誌』上・下

（永久保秀二郎日誌を読む会、2012年）が刊行されるなど、永久保秀二郎をめぐる資料的な環境に変化が見られる。本書の刊行によって、永久保の主要な記録がすべて刊行されたことになり、今後の研究の進展が期待できる。

また本書の刊行によって、研究の可能性がさらに広まったことを指摘しておきたい。著者も紹介しているように、永久保が『アイヌ語雑録』の作成を進めていた1918（大正7）年8月13日に、アイヌ語研究者として著名な金田一京助が永久保を訪問している。『永久保秀二郎日誌』には、

（大正7年8月）13 火 曇 75

文学士金田一京助氏来訪。アイヌ研究ノ為来村トノ事、稍三時許談話、即メンカクス祖先ヨリ系譜ヲ写サセ又茶支骨^{チャシコツ}絵葉書四五枚、外小鷲、小室、志富、八重各清及図画二枚、浅次郎昔時アイヌ落切ヲ添フ。自己著述出来次第贈ル事ヲ約シ去ル。但シ先年三省堂辞典編纂関澤君ト同僚ナリシ由ヲ聞ク。故ニ逢着此現況ヲ報セン事ヲ乞フ。彼諾矣（『永久保秀二郎日誌』下、永久保秀二郎日誌を読む会、2012年、338頁）。

とある。この金田一の訪問には、実は石川啄木が関係している。訪問の10年前、1908（明治41）年1月に、釧路新聞の記者であった石川啄木はつぎのような手紙を金田一に送っている。

（明治41年）1月30日 釧路より 金田一京助宛

…… 二白 アイヌには急がしくてまだ逢はず候が、当町より十四五町^{ヘルトリ}の春採湖と申す湖の近所に部落あり、道庁で立てたアイヌ学校ありて永久保春湖と申す詩人が校長の由、遠からず訪問して見るつもり候。それから社長の所に、明治初年の頃何とかいふアイヌ研究者が編纂したアイヌ語辞典（但し語数順にしたる）の稿本（未だ世に公にせられざる）がある由、これもいつか見たく存居候、小生が長く居る様だつたら本年の夏御来遊如何、……（『石川啄木全集』第7巻、書簡、筑摩書房、1979年、171頁）。

このように金田一に永久保の存在を知らせたのは、石川啄木である。この時期、永久保は官立の春採尋常小学校の准訓導の任にあつた。啄木が、永久保を訪問したかどうかはわからない。『永久保秀二郎日誌』には、啄木の名は見えないようである。また啄木はアイヌ語辞典についても言及しているが、啄木が社長といているのは、釧路新聞社の社長であった白石義郎のことである。啄木の言う、語数順にしたアイヌ語辞典がどのようなものであったかについては、今のところわからない。

このような事実をひとつ取っても、永久保をめぐる交友関係についてはまだまだ不明なことが多い。著者の業績に導かれて今後、永久保秀二郎の研究および北海道東部のアイヌ語やアイヌ民族の教育に関する研究が進むことを期待したい。

（なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校）